

特集
すいよう

福島第1原発事故から12年 現場を見た

東京電力福島第1原発事故の発生からもうすぐ12年。汚染水問題の解決や核燃料デブリ取り出しなど事故収束の道筋はいまだ不透明な状況のもとで、事故現場では廃炉に向けて作業が進められています。1月、原発構内の合同取材に参加しました。（中村秀生）

巨大な穴

原発構内の5、6号機に近い海側エリアでバスを降りると、ほのかな潮のにおりを含んだ冷たい風が体に

汚染水・デブリ…道筋見えないまま

海洋放出へ急ぐ東電

突き刺さりました。

沖合約1.5キロの海面から突

き出た4本の柱が小さく見

えました。事故で発生した

放射能汚染水を処理した

後、放出口の工事を急ピッチで

進めている現場です。「モ

後の水をためる「放水立

つス処理水」を、環境への

放出基準値未満に薄めて放

出する政府と東電の「海洋

放出計画」。東電が、その

理水を薄めるための海水を

大量に取り込む取水路があ

ります。その横で、薄めた

側から8割程度まで完了し

ています。

抗」の構築が進んでいまし

た。目の前には、「立て坑」

の土留水槽を収める巨大な

穴が掘られていました。

海底トンネルの掘削は陸

側から8割程度まで完了し

ています。

タンクが

海抜約30メートル、海側エリアから数百メートルの地点には、灰色の1000ト級の巨大なタンクがびっしり並んでいました。K4タンク群。海洋放出のための測定・確認用タンクです。

現在、敷地内にある1000基超のタンクに、汚染水からセシウムなどの放射性物質を除去する多核種除去設備（アルプス）で処理した約130万トがたまって

います。アルプスで除去できないトリチウムは平均濃度が放出基準の約10倍です。そのうち7割は、トリチウム以外の放射性物質も基準を超えて残っている「処理

汚染水の発生量は、原子炉建屋などの周囲の土壌を凍らせる「凍土壁」などの対策で減少してきました。とはいえ、建屋への地下水や雨水の流入は続いており、根本的解決には程遠い

理途上」の汚染水。アルプスで2次処理します。

政府・東電の計画による

と、海洋放出の前に、K4

タンク群で放射性物質の濃

度を測定し、トリチウム以

外が基準値を下回っている

かを確認します。

海洋放出をめぐるのは、

地元の漁業者をはじめと

する多くの反対・懸念の声

があがっているなか、岸田文

雄政権は1月13日、今春か

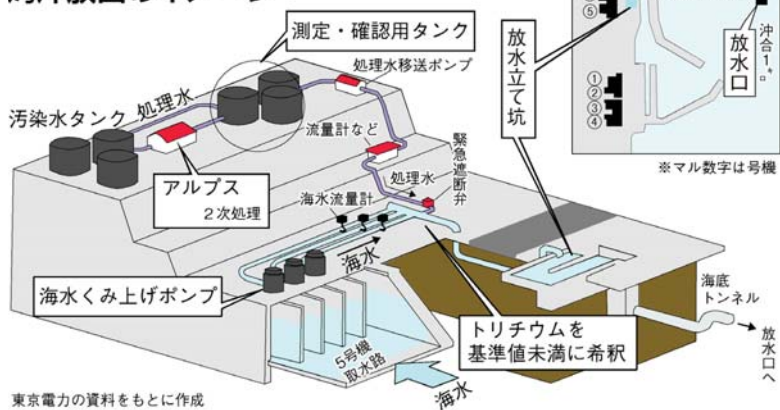
ら夏ごろの放出開始を閣議

決定。強硬な姿勢が批判を

呼んでいます。

汚染水の発生量は、原子炉建屋などの周囲の土壌を凍らせる「凍土壁」などの対策で減少してきました。とはいえ、建屋への地下水や雨水の流入は続いており、根本的解決には程遠い

海洋放出のイメージ



無謀実感

一方、炉心溶融や水素爆発を起した1〜4号機をのぞむ高台からの風景は、2年前に訪れた時と大きく変わっていませんでした。

1、2号機では使用済み燃料プールからの核燃料取り出しに向けた準備が進みますが、2号機は24年度以降、1号機は27年度以降です。1〜3号機の溶け落ちた核燃料デブリの取り出しは、21年までに予定されていた試験的な取り出しさえできていません。

廃炉の道筋も見えないなか、海洋放出の準備だけが着々と進められている事故の無謀さを改めて実感しました。

1号機



3号機 4号機



2号機



「放水立て坑」の構築状況。上流水槽を収めるための巨大な穴が掘られていました

と水抜きボーリングとい

う二つの提案をしています。

状況です。

汚染水の増加を止められ

れば、タンクがひび迫して

いるからと海洋放出を強行

する必要もなくなりま

す。

使用済み核燃料プールから燃料を取り出すための設備の建設が進む2号機原子炉建屋

事故発生から12年たった現在も水素爆発の跡が生じた1号機原子炉建屋

かまぼこ形のドームが特徴的な3号機原子炉建屋手前と四角いカバーで覆われた4号機原子炉建屋台奥

環境の話題 田舎暮らし 家族 文化の話題 金 土 暮らしワイド

95年 創刊 しんぶん赤旗